ごろつき船 前編（十卷 二、四三九米）

帝キネ時代映畫

原作者　大佛次郎
脚色者　白尼重亮
監督者　渡邊新太郎
撮影者　高橋武則
主演者　明石綠郎
紹介　第三百七十八號

大衆文藝陣の寵兒大佛次郎の名作、だがこの脚色者は渦中に飛び込んで來る人物の多いのに少からず面喰つた態である。開卷、ごろつき船のロンゲとアップ、繼いで啞のアイヌ、そして事件の發端たる御用商人八幡屋の燒討、基等が如何なる聯絡を持つものだか一向不明の儘に主要人物は續々と登場する。燒討後になつて漸く物語の糸口が解かれ始めた、と思ふと今迄の主人公三木原伊織が生死不明になり、一方燒討の時の惣吉、立廻りの時の旅僧、と不可解な人物の出現がある。で原作を知らない觀客には人物の關係や、ごろつき船の眞相行動を知るのが容易でない。物語の根據地松前に檢視役人が來て、啞のアイヌが土屋主人正と判明してから映畫は次第に興味が出て來る。そして主人正が中心人物と決まるに及んで漸く落付きを得、事件の展開は陸より海へ、轉てはごろつき船に移るであらうと思はれる。然しながら物語の軸心と土屋主人正の素性の隱蔽は脚色者が好んで用ひた連續物の怪奇味の爲の手段とすれば、それは此の場合に於ては損失である。前篇ではごろつき船には一切觸れず一途にその道程に腐心してゐる。スケールの擴大さが渡邊監督の手腕の振ひ所であらうが遺憾乍ら人物の點綴と復雜な原作に足を縛られた形で、一寸した小細工が二三見られるにさゝまり、潑溂として生氣に富む渡邊監督の姿はこゝでは影をひそめてゐる。本篇は未だ序曲に過ぎない。スターも出揃はないし、本舞臺はこれからである。明石綠郎、松本田三郎、中山介二郎を始め出演者一同氣を合せての熱演を買ふ。撮影は無難。以呂波丸のセットも宜し。　池田　重近

興行價値――「江戸城總攻め」に次ぐ帝キネの特作品。加へて製作スタッフの吸引力もこの社のものとしては上の部である。何處を問はず、誰にでも受けやう。早々後篇を出すことが肝要である。（九月十二日　常盤座）